

立間祥介訳

三 国 志

平凡社

立間祥介訳

二国志

一

訳 者 紹 介

立間祥介 1928年東京生。善隣外事専門学校卒。
専攻 中国文学。慶応義塾大学教授。主訳書『従文自伝』（河出書房）『中国講談選』『呼蘭河の物語』『兒女英雄伝』『今古奇観』（共訳）（平凡社）『駱駝祥子』（岩波書店）

三 国 志 コンパクト版 第一巻

発行日 一九八八年二月九日 初版第一刷

定価 一〇〇〇円

訳者 立間祥介（たつま・しょうすけ）

発行者 下中 弘

発行所 株式会社 平凡社

〒一〇二 東京都千代田区三番町五

電話・東京（〇三）二六一―一七六五（編集）

（〇三）二六五―〇四五五（営業）

振替・東京八―二九六三九

印刷 東洋印刷株式会社

製本 和田製本工業株式会社

落丁・乱丁本は小社サービス係でお取替えいたします（送料小社負担）

ISBN4-582-32511-4

三国志主要人名表

配列は五十音順。

* 関羽・張飛の生年は正史に記載なく「三国志」によった。

袁 熙（?—二三七）字は顯奕。袁紹の次子。

袁 術（?—一九九）字は公路。袁紹の従弟。淮南（九

江）で成を建て、一時帝位を僭称する。

袁 尚（?—二三七）字は顯南。袁紹の末子。

袁 紹（?—二三三）字は本初。漢の名門の出で河北に

強大な勢力を張る。性は優柔不断、ために官渡で曹

操に大敗を喫する。

袁 譚（?—二三五）字は顯思。袁紹の長子。

王 允（二三七—二一八）字は子師。憂国の文官。董卓暗殺

の立役者。

賈 詡（二四七—三三三）字は文和。はじめ董卓に仕え、の

ち曹操に仕える智將。

郭 嘉（二七〇—二〇七）字は奉孝。曹操の片腕といわれた

幕僚。

郭 汜（?）幼名阿多。董卓の部將。李傕とともに、

一時天下をとる。

夏侯淵（?—二三七）字は妙才。夏侯惇の従弟。惇とと

もに曹操の挙兵に参加、以来数々の戦功を立てる。

夏侯惇（?—二三〇）字は元讓。曹操挙兵以来の部將。

曹丕即位のとき大將軍となる。

何 進（?—一八六）字は遂高。靈帝の外戚で無能な成

上り者。

関 羽（?—二三〇）字は雲長。劉備に兄事する文武両

全の名將。信義に厚く、大薙刀をとっては天下無敵。

蜀の五虎將の一。

甘 寧（?—二三三）字は興霸。孫權の部將。

魏 延（?—二三四）字は文長。劉表の部將。のち劉備

に仕える。

許 褚（?）字は仲康。曹操の武將。親衛隊長として

常に身辺に侍す。

黃 董（?）字は公覆。孫堅父子三代に仕えた部將。

赤壁の合戦に際し苦肉の計を献じる。

公孫瓚（?—一九六）字は伯珪。河北の豪族で劉備の学

友。

黃 忠（?—二三〇）字は漢升。弓の名手。劉備父子に

仕えた蜀の五虎將の一。

孔融（二五—三〇）字は文舉。孔子二十世の孫。文名

高く建安七子の一に数えられる。

周倉（？—三〇）黄巾の殘党で、関羽を慕つてその

部將となる豪傑。正史には見えない。

周泰（？）字は幼平。孫策・孫權の部將。

周瑜（二五—三〇）字は公瑾。孫策の義弟。孫權を助

け、呉の大都督として赤壁の合戦で威名を馳せる智

將。

荀彧（二〇—三三）字は文若。曹操の幕僚。

諸葛瑾（二七—三四）字は子瑜。諸葛亮の兄。孫權の幕

僚。

諸葛亮（二一—三四）字は孔明。別名臥竜。襄陽郊外の

隆中に隠棲中すでに天下三分の計をたて、劉備の三

顧の礼にこたえて出盧、非力の劉備を助けて蜀を建

てる不世出の奇才。

徐庶（？）字は元直。一名単福。諸葛亮の学友。は

じめ劉備の軍師、のち曹操に仕える。

曹仁（二六—三三）字は子孝。曹操の従弟。曹操に従

つて転戦、曹丕即位後、大司馬となる。

曹操（二五—三〇）字は孟德。幼名阿瞞。「乱世の奸

雄、治世の能臣」といわれ、権謀術数にたけた文武

両全の英雄。幕下に多くの人材を集め、天機をつか

んで中原を統一、魏王となる。魏の武帝。

曹丕（二七—三六）字は子桓。曹操の長子。文武両道

にたけ、のち獻帝を廃して魏を建てる。魏の文帝。

孫堅（二六—一六）字は文台。孫子の末孫。弱年より

勇名をうたわれ、董卓討伐戦で洛陽一番乗りの偉功

を立てる。

孫權（二一—三三）字は仲謀。孫堅の次子。父兄の業

を継ぎ呉を建てた名君。呉の大帝。

孫策（二五—三〇）字は伯符。孫堅の長子。堅の没後、

幕下に人材を集めて江東の基礎をきずく。

趙雲（？—三六）字は子龍。劉備に仕え当陽の長坂

坡で単騎百万の敵中を突破、幼主劉禪を救出した英

雄。

張角（？—一八）読書人出身の黄巾の乱の首謀者。

大賢良師・天公將軍と自称。

張郃（？—三三）字は儁乂。袁紹の部將。のち曹操

に仕える。

張松（？—三三）字は永年。劉璋の幕僚。劉備に益

州の地図を献じ入蜀の手引きをする。

張 昭（五六一三三）字は子布。孫策・孫権の幕僚。孫

策の信任を受け、呉の重鎮となる。儒学の造詣深く、

『春秋左氏伝解』『論語注』を著す。

貂 蟬（？）王允の館の妓女。王允の意をうけて董卓

の侍妾となり、呂布を董卓暗殺にはしらす美女。正

史には見えない。

張 飛（？—三三）字は翼徳。劉備・関羽に兄事する。

直情径行、武勇拔群の勇将で、長坂橋では一喝、曹

操の大軍を退ける。蜀の五虎将の一。

張 遼（二六九—三三）字は文遠。はじめ呂布に仕え、の

ち曹操の部将となる。情義に厚く、関羽と肝胆相照

らす仲となる。

張 魯（？）字は公祺。五斗米道の教祖として三十年

にわたり漢中に君臨、のち曹操に降る。

陳 宮（？—一九）字は公台。曹操打倒を念願とする

呂布の幕僚。

陳 琳（？—三三）字は孔璋。建安の七子の一。文才

をもつてはじめ袁紹に仕え、のち曹操に仕える。

程 昱（二四—三〇）字は仲徳。曹操の幕僚。

程 普（？）字は徳謀。孫堅父子三代に仕えた文武両

全の部将。

陶 謙（二三—二四）字は恭祖。徐州の牧。劉備に徐州

を譲る。

董卓（？—一九）字は仲穎。残忍好色な隴西の豪族。

強大な武力を背景に献帝を擁立し、専横をさわめる。

馬 超（二六—三三）字は孟起。馬騰の長子。劉備父子

に仕えた蜀の五虎将の一。

馬 騰（？—三三）字は寿成。漢の伏波將軍馬援の末孫。

巨軀強力の隴西の豪族。

龐 統（二七—三四）字は士元。別名鳳雛。劉備の軍師。

諸葛亮と並び称される知恵者。

李 傕（？—一九）董卓の部将。董卓の没後、郭汜と

ともに長安に乱入し、一時天下をとる。

劉 琦（？—三三）劉表の長子。温厚篤実の人であつ

たが継母蔡氏にうとまれ、江夏へはしって劉備の庇

護下にはいる。

劉 協（二六—三四）後漢第九代の皇帝。献帝。曹丕に

廃され山陽公となる。

劉 璋（？—三三）字は季玉。益州の牧。暗愚のため、

手を拱いて劉備に益州を奪われる。

劉禪（二〇七—二七二）字は公嗣。幼名阿斗。劉備の子。

宦官を寵愛して亡国を招く暗君。蜀の後主。

劉備（二〇六—二三三）字は玄德。漢の中山の靖王の末孫。

黄巾の乱にさいして関羽・張飛とともに挙兵。軍師

諸葛亮の助けを得て蜀の主となる。蜀の昭烈帝。

劉表（二〇四—二〇八）字は景升。荊州の牧。

呂布（？—一九〇）字は奉先。後漢末随一の武勇をう

たわれながら、転変常なき性格のため天下の嫌われ

者となる。

魯肅（二三—二三七）字は子敬。孫權の幕僚。蜀との提

携に腐心する。周瑜の没後、呉の大都督となる。

目次

第一回 3

桃園に宴して 三豪傑 義を結び
黄巾を斬つて 英雄 始めて功を立つ

第二回 23

張翼徳 怒つて督郵を鞭うち
何国舅 謀つて宦官を誅す

第三回 47

温明殿に議して 董卓 丁原を叱し
金珠を贈つて 李肅 呂布を説く

第四回 69

漢帝を廃して 陳留 位に即き
董卓を謀らんとして 孟徳 刀を献ず

第五回 90

矯の詔 発せられて 諸鎮 曹公に応じ
関兵を破つて 三英雄 呂布と戦う

第六回 114

金闕を焚いて 董卓 兇を行ない
玉璽を匿して 孫堅 約に背く

第七回 131

袁紹 盤河に公孫と戦い
孫堅 江を越えて劉表を撃つ

第八回 149

王司徒 巧みに連環の計を使い
董卓 大いに鳳儀亭を鬧がす

第九回 169

暴兇を除いて 呂布 司徒を助け
長安を犯して 李催 賈詡に聴く

第十回 193

王室に勤めんとして 馬騰 義兵を挙げ
父の讐を報ぜんとして 曹操 師を興す

第十一回

209

劉皇叔 北海に孔融を救い

呂温侯 漢陽に曹操を破る

第十二回

233

陶恭祖 三たび徐州を譲り

曹孟徳 大いに呂布と戦う

第十三回

251

李傕・郭汜 大いに兵を交え

楊奉・董承 双して聖駕を救う

第十四回

277

曹孟徳 駕を移して許都に幸し

呂奉先 夜に乗じて徐郡を襲う

第十五回

304

太史慈 酈に小霸王と闘い

孫伯符 大いに敵白虎と戦う

第十六回

331

呂奉先 戟を轅門に射

曹孟徳 師を清水に敗る

第十七回

359

袁公路 大いに七軍を起こし

曹孟徳 三将を会合せしむ

主要人名表

前付

地 図

377

三国年代対照表

379

三^{さん}

国^{こく}

志^し

一

立^た 羅^ら

間^ま 貫^{かん}

祥^{しょう}

介^け 中^{ちゅう}

訳 作

とうとうと東する水はてしなく

長江に消えし英雄かずしれず

是非成敗もうたかたに

青山のひとりのこりて

紅の夕日迎えるそもいくそたび

白髪まげの漁翁さぎ仙人しんじんなぎさにたちて

秋の月春の風みて年へたり

一壺のにぎり酒もて相逢えば

過ぎしいくたのことどもも

いまはむかしのかたりぐさ

第一回

桃園に宴して

三豪傑 義を結び

黄巾を斬つて

英雄 始めて功を立つ

そもそも天下の大勢は、分かれること久しければ必ず合し、合すること久しければ必ず分かれるもの。周のすえ七国分かれ争い、秦に併合されたが、秦亡ぶや楚・漢分かれ争い、また漢に併合された。漢朝は、高祖が白蛇を斬つて義兵を興し、天下を統一したのはじまり、のち光武帝の中興があつて、以来献帝まで伝わり、ついに三国に分かれた。このたびの乱の源をただせば、およそ桓・靈二帝より始まつたといえる。桓帝は正義の士を弾圧し、宦官を重用した。桓帝崩じ、靈帝即位するや、大將軍〔注二〕竇武・太傅〔注二〕陳蕃兩名が相ともに補佐に当たつた。おりしも宦官曹節らが権力を壟断しており、竇武・陳蕃がこの殊戚を謀つたが、事破れて却つて殺害され、これよりして宦官はいよいよ専横をきわめることとなつた。

建寧二年（六六）四月十五日、帝溫徳殿におでましあつて、正に玉座に着こうとされたとき、とつぜん殿中の一角に不気味な風が吹きおこるとみるまに、青色の大蛇が梁上より飛来して玉座に蟠つた。帝があつと昏倒されるのを、左右の者が急ぎ宮中に扶けいれまいらせ、百官どもはた

だあれよあれよと逃げまどうばかり。須臾にして蛇の姿は消え失せ、たちまち凄じい雷雨となつて電までまじえ、夜半まで降りつづいて、ために倒壊した家屋は数知れなかった。

建寧四年二月、洛陽に地震あり、この時も大津浪がおこつて、沿海の住民とことく巨浪に捲かれ海に運び去られた。

光和元年（二七）、雌鶏が雄となつた。

六月一日、十余丈の黒色の妖氣が温徳殿中に飛びいった。

秋七月、玉堂殿より虹が立ち、五原の山々に激しい山崩れがあつた。

かかる不吉な事件が一、二にとどまらなかつたので、帝が臣下たちに災害異変の原因をおたずねになつたところ、議郎「注三」蔡邕が憚る色もなく、虹の落ち鶏の變化せるは女子と宦官が政治に容喙せるためとの上奏文を奉つた。帝はこれを見そなわされ、嘆息されて更衣にお立ちになつた。後刻、曹節がひそかにこれを読み、巨細にわたつて左右の者に知らせたので、一同、事をかまえて蔡邕を罪におとし、官を召し上げて国許へ放逐した。その後、張讓・趙忠・封諝・段珪・曹節・侯覽・蹇碩・程璜・夏惲・郭勝ら宦官十名党を組んで奸悪を働き、「十常侍」注四と称え、帝は張讓を信じ敬つて「父上」と呼ばれた。これより政道日々に紊れ、ために天下の人民ら乱を思い、盜賊各地に群がり起こるにいたつた。

時に、鉅鹿郡に張角・張宝・張梁なる三人の兄弟があつた。張角は由来拳人たり得ずにいた秀

才「注五」で、山に入り薬草を採って暮しをたてていたが、一日、山中で藜あけぎの杖をついた瞎眼童
顔の老人に出会った。老人は彼をとある洞穴に呼び入れ、天書三巻を授けて、

「これは太平要術と申すもの。汝これを得し上は、天に代わつてあまね普く教えをひろめよ。もし悪心
きざすことあらば、天罰たちまち下るであらう」

彼がはつと平伏して名を尋ねると、

「わしは南華老仙である」

と言うなり、一陣の清風と化して消え去った。

張角はこの書を得てより日夜習得にはげみ、風を呼び雨を喚ぶことができるようになって「太
平道人」と号した。中平元年（一八四）正月、疫病が流行したとき、張角は護符と聖水をひろく施
して人々の病を癒やし、自ら「大賢良師」と称した。その弟子は五百有余人。全国各地を渡り歩
いたが、いづれも呪文を書き呪術をよくした。のち帰依するもの日を追つてふえたので、張角は
三十六の方ほう「注六」を立て、一万余人をもつて、大方、六、七千人をもつて小方とし、それぞれ
頭目を置いて將軍と名乗らせ、「あや書の世はすぎ黄の世だ。甲子の年は天下大吉だ」なる言葉と言
いひろめ、人々に白土で「甲子」という二字を家の大門に書きつけさせた。青・幽・徐・冀・荆・
揚・兗・豫八州の人民は、戸ごとに大賢良師張角の名札を祀まつつて崇め尊んだ。

張角は一味の馬元義ばげんぎに金帛を持たせてひそかに宦官封諂のもとへ遣わし、誼みを結んで内応の
手筈をととのえらるとともに、二人の弟を呼んで言うのに、

「民の心は得難きもの。いまや民心はわが方にあり、天下を取る好機と見た。これをみすみす取り逃がすことはあるまい」

かくてひそかに黄色の旗をつくつて蜂起の期日を定め、同時に封譖にこの由を伝えるべく、弟子の唐周〔注七〕に書面を届けさせた。唐周は禁裡に直行して謀反の事を訴えに及んだ。帝は大將軍何進に命じて、軍を馬元義のもとに差し向け、これを打ち首にするとともに、封譖ら一味の者を取りおさえて獄に下したもうた。張角は事の露われたのを知つてにつかに兵を挙げ、自らは「天公將軍」と称し、張宝は「地公將軍」、張梁は「人公將軍」と称して、人々に触れた。

「いま漢の運尽きんとして、大聖人いず。汝ら皆よろしく天に従い正しきにつき、もつて太平を樂しめよ」

四方の人民、黄色の巾で頭をくるみ張角の謀反に加わるもの四、五十万。賊の勢いとおおいにふるい、官軍は戦わずして四散した。何進は、各地の防備を固め賊を討つて功を立てよとの詔をすみやかに下しおかれるよう帝に奏上し、また中郎將〔注八〕盧植・皇甫嵩・朱儁を三方面へ派遣し、精兵をひきいて討伐に向かわせた。

さて張角の一軍は進んで幽州の界を侵した。幽州の太守〔注九〕劉焉は、江夏郡竟陵県の人で漢の魯の恭王の末孫であつたが、このとき賊軍迫ると聞いて、校尉〔注一〇〕鄒靖を呼んで諮ると、鄒靖の言うのに、

「賊軍は多くわが軍は手薄にござりますれば、火急に兵を募り、賊に備えるが至当かと心得ます」

劉焉はこの意見をいれ、ただちに義兵募集の高札を出した。高札が涿県に立てられたとき、これに応じて涿県より一人の英雄が現われた。この人、学問をあまり好まず、性温和で口数すくなく、喜怒を色にあらわさない。生来大志を抱き、つとめて天下の豪傑と交わりを結んでいる。身の丈七尺五寸（後漢の一尺は、二三・七五センチ）、両の耳は肩まで垂れ、手を伸ばせば膝下にとどき、目はよく己の耳を見、顔は冠の白玉の如く、唇は紅をさしたよう。中山の靖王劉勝の末孫、漢の景帝陛下の玄孫、姓は劉、名は備、字玄徳である。そのかみ漢の武帝の御代、劉勝の子劉貞、涿鹿亭侯に封ぜられ、のち皇室に規定の祭祀料を差し出すことを怠つて官を召し上げられたことがあり、その血筋の涿県に遺つたものである。玄徳の祖父は劉雄、父は劉弘という。劉弘はかつて孝廉〔注一〕に推挙されて官に仕えたが、若くして死んだ。玄徳は幼くして父親に死に別れ母親に孝養をつくした。家は貧しく、草鞋を売り蓆を織つて身過ぎとしていた。涿県の樓桑村に住んでいたが、家の東南に桑の大木があつて、高さ五丈あまり、遙かに望めば亭々として馬車の傘のようであつた。ある相術師が言つたことがある。

「この家からは、きつと貴人が出られましょうぞ」

玄徳は幼時、村の子供たちとその木の下で遊んでいて、

「おれは天子になつて、この車に乗つてみせるぞ」

と言ったことがあったが、叔父劉元起は、その言葉を奇として、

「うむ、この小僧、なかなか見どころがあるわい」

と、それ以来、玄徳の家が貧しかったので金をあたえ長く面倒をみてやった。

十五歳のとき、玄徳は母親より遊学に出され、鄭玄・盧植に師事し、公孫瓚らと交わりを結んだ。劉焉が募兵の高札を出したとき、玄徳はすでに二十八歳〔注二〕であつた。

その日、彼は高札を読んでわれ知らず深い吐息を洩らした。と、うしろで、

「男一匹、国のために働こうともしないで、溜息をつくとは何事だ」

と大音におめく者がある。

振りかえつて見れば、身の丈八尺、豹の如き頭につぶらな目、肉づきあくまで豊かな頬から額に虎の如き鬚をたくわえ、その声万雷のはためくが如く、その勢い奔馬の如き男である。その異様な風采を見て名を問うと、

「おれは姓は張、名は飛、字翼徳。代々この涿郡の住人で、田地をいくらか持ち酒や豚肉をあきなつてはいるが、つねづね天下の豪傑と付き合っているものだ。ちようど、いま、おぬしがこれを見て溜息をついたので、声をかけたんだ」

「それがし、もとは漢皇室の流れを引く、姓は劉、名は備と申すもの。近頃、黄巾賊の猖獗を耳にし、賊を平らげ民を救おうとの心ありながら、如何せん力たらず、それ故思わず溜息を洩らしたのでござる」